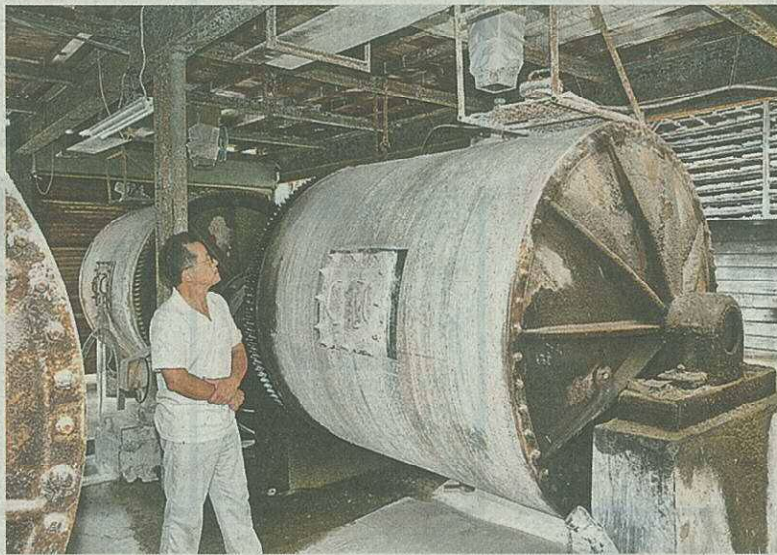


カキ殻胡粉 本格製造



カキ殻を粉砕するボールミル

工業原料製造の山陽クレー工業(備前市吉永町南方)は、カキ殻を粉砕した胡粉の製造販売に本格的に乗り出した。ろう石を砕いて作るクレーの生産技術を応用し、顧客のニーズに応じて粒子の大きさを調整。既に民芸品向けに出荷しており、農業や美容分野も視野に販路を広げる。

(森元俊一朗)

山陽クレー工業

胡粉は、貝殻を粉砕したり、ネイルアートの白色顔料。張り子の虎に使われたりしている。やだるまの下地として塗。同社は、カキ殻を玉石

民芸品下地やネイルアート 粉砕技術に応用



(手前から)吉備胡粉と原料のカキ殻、胡粉を使った民芸品

(5センチ大)とともに円筒形の粉砕機(ボールミル)に投入し、中を水で満たして回転させる。カキ殻は玉石とぶつかったり、玉石と壁面に挟まれてすりつぶされたりして粉体になる。粉体は水とともにメッシュに通し、藻や漁網の繊維くずなどの不純物を取り除いて仕上げる。粒子は数ミリ(1ミリは千分の1)〜数百ミリ。粉砕機の稼働時間やカキ殻の投入量を変えるなどして調整する。他社製に比べて粒子が細かく、不純物が少ないのが特長という。「吉だ」という。試行錯誤の末、備前胡粉の商品名で1キロ50円から、自社サイトや電話で注文を受け付ける。胡粉は2008年に工業用密封材として生産を開始。3年ほど前、岡山県外の胡粉メーカーが製造をやめたのを機に、同社製を使っていた岡山市内外の民芸品や特殊塗料のメーカーから代替生産の依頼が相次いだという。試行錯誤の末、粒子の大きさの調整や不純物を除去する手法を確立し、本格展開に踏み切った。

胡粉の売り上げは、22年3月期に800万円と現在の4倍に伸ばす方針。瀧本弘治社長は「クレーの需要は横ばい。ネイルアートや飼料、肥料としての可能性も探り、業容を拡大したい」と話している。

山陽クレー工業は1940年創業、資本金4500万円、売上高2億7千万円(19年3月期)、従業員12人。